

# 新型コロナウイルスと社会の変革

## —人類生態学の視点から—

国立環境研究所 渡辺知保

### 1. 「現代社会」はどんな社会か

人類生態学（≡” human ecology”）は生態学の一分野であり、人間と環境との関わり方を通じて人間とはどのような生き物であるかを解明し、関わり方に起因する諸課題の解決にも貢献する学問である（と思う）。言い換えると、環境問題の解決における人類生態学の役割は、地球生態系（生物も無生物も含め）における人類の適切な位置どりを明確にすることに尽きると言える。

人類生態学の視点からは現代はひとつの転換点を迎えていると言える。それは気候危機に代表されるプラネタリー・バウンダリー（Planetary boundaries）の議論や、「人新世」（Anthropocene）という言葉で代表されるように、人類（人口×活動）が地球に与えるインパクトが大きくなり、システムとしての持続を危うくしている時代、地球の有限性が明確になってきた時代だということである。人類の登場から現代社会に至るまでに、大きなライフスタイルの変革は少なくとも2回（食糧生産の開始（いわゆる「農耕革命」）と工業化（「産業革命」）-あったが、今、3回目が必要とされているとも言えよう。

### 2. 「ポストコロナ」とは何か

新型コロナ感染症（以後、コロナと省略）はこういう現代社会に登場して、その社会基盤を揺るがせたが、様々な場面で with-コロナ、post-コロナなどの議論が沸き起こっている。こうした議論の中には、新たな未知の感染症出現に対してレジリエントな社会の構築といった明確な目的を掲げたものもあるが、コロナや感染症流行そのものとはあまり関連しないものも多い。世界中でアイデアが競われているグリーンリカバリーや、環境省が進める地域循環共生圏などの議論はその代表例であり、気候危機や地産地消的な議論は、コロナ流行以前から存在していた。なぜこうした議論が活発化したのか。

コロナの世界的流行に伴い、世界的規模での経済活動の抑制と、そのための人々のライフスタイルの変化が起こった。これによって経済成長、時空間の効率的な利用と広範囲の社会的接触という、これまで3-4世紀の間に加速しつつも連続していた、私達が半ば当然のものとして捉えていた、様々なトレンドに急ブレーキがかかったと言える。CO<sub>2</sub>排出量の推移は、この急ブレーキを象徴している。この急ブレーキの結果として、社会構築の

様々なオプションが「見えてきた」結果、それについての議論が盛んになったと言えるだろう。したがって、感染症そのものより現代社会の持っている慣性（inertia）についての議論が中心となっており、この点を意識しておくことが重要と思う。

### 3. 社会変革のガイドライン

このように考えると、post-コロナに向けた社会変革のガイドラインは、コロナ流行以前からのものを含め、多数存在する。SDGs を筆頭に、パリ協定に伴う国・組織などの気候危機対策（「適応策」を含む）、循環経済、地域循環共生圏、Society5.0などは、すでに存在するガイドラインであり、グリーン・リカバリーはコロナを契機として、こうしたガイドラインによる改革の加速をめざすものと捉えられる。これらのガイドラインは細部で異なっていたり、互いにコンフリクトする部分もあるだろうが、現代社会の抱える問題の解決を念頭に置いており、冒頭に書いた「転換点としての現代」という視点も、大なり小なり意識されている。また、関連する議論として資本主義の限界を指摘する論調も多い。

### 4. 社会変革にあたって考えるべきこと

これらのガイドラインも視野に入れた上で、どのような社会変革が望ましいかを決めるのは「社会」であり、多くのステークホルダーによる議論が必要である。ここでは人類生態学の視点から、留意すべき点を挙げておき、当日の議論の材料としたい。

第一は、「人新世」を自覚することの必要性。私達は自分たちの活動のスケールを住処である地球生態系の有限性と比較してとらえる必要がある。上記のガイドラインの多くは、この有限性に端を発しているものの、それが実感として広く浸透しているとは言えないのではないか。第二には、人間中心主義が人間を滅ぼす可能性さえあるという点。どのガイドラインも明示的か否かにかかわらず「人間中心主義」である。しかしヒトに「ライバル」がいなくなったこと（ウイルスはその例外とも言える）は、人類にとってプラスにもマイナスにも働いている。第三に、特定の問題の解決に重要な技術開発・イノベーションは、社会変革という広い視点から見て有用かどうかは未知であるし、場合によっては変革への「抵抗勢力」となる可能性もある点。第四に、変革の道筋を過度に固定せず、随時修正できるようなスキームを用意しておくこと。このためには、社会変化が惹き起こしたインパクトを常に社会にフィードバックする仕組みが必要となる。

これらの提言に共通することは、どんな社会変革を行うにしても、できあがった社会は地球という生態系の中で稼働し得るものでなければならない、ということであり、そのためには科学（自然・人文・社会）からのインプットが重要であることは自明だろう。